

Humanity & Nature Newsletter



no. 1

1 April 2006

目次

巻頭インタビュー ———— 02

今までなかった学問、
今までなかった研究形態

総合地球環境学研究所長 | 日高敏隆

●特集—1 研究プロジェクトより ———— 04

水が涸れたオアシスから学べること
オアシスプロジェクト | 竹内 望

●特集—2 研究プロジェクトより ———— 06

地域との連携を試みて

西表プロジェクト | 高相徳志郎

●特集—3 プロジェクト研究発表会 ———— 08

研究スタイルを共同でつくりあげる

議長団 | 佐藤洋一郎

地球研だより ———— 10

招へい外国人研究員の来訪/連携機関懇談会を開催
第10回地球研市民セミナー/地球研が上賀茂に移転

出版物紹介 ———— 11

『生物多様性はなぜ大切か?』/『中国の環境政策 生態移民』
『里と森の危機』

お知らせ ———— 12

竣工記念式典/人間文化研究機構シンポジウム/
第12回地球研市民セミナー/地球研フォーラム/
新施設へのアクセス/上賀茂だより



今までなかった学問、今までなかった研究形態

■ 日高敏隆 [大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所長]

— まずは、地球研の使命と方針について、所長のお考えを。

日高 そもそも地球環境問題の根元は何かというと、それはまあ、人間文化の問題なんだということですね。100万種も200万種もいる動物の中で、“地球環境問題”なんてことを引き起こしてるのは人間だけです。それは、人間の生き方の根本が、自然を支配して生きようと思うことに問題があるらしい。他の動物は火を使おうとはしない。農業も考えない。でも人間は頭もいいし、実際それができたんですね。そうやって今日まで人間は生きてきて、色々とすばらしいものを作ってきた。だが、自然に手をかけているから、必ず自然からの反作用がある。反作用が人間に都合の悪いことだとそれを潰そうとする、そうするとまた反作用が現れる。それで、人間と自然のあいだに相互作用の環ができて、その環がだんだん複雑になってきた。その結果が、いわゆる地球環境問題です。だから、どういう環になっているのかを詳しく調べなければいけない。

そしてそれがわかっただらば、じゃあ、どうしたらよいかを考えようというわけなんです。でもそのときに、自然を支配するのは今後一切やめよう、というふうにはいかない。じゃあ今後どうしたらよいか、考えなきゃいけない。“持続可能な”というふうな消極的な話ではなくて、ここでは“未来可能な”ぐらいのつもりでそれを考えていきたい、と思っています。いま目の前のゴミ問題をどうするか、そういうレベルじゃなくて、もっと長期的なスパンで、もっと奥にある人間と自然の複雑な関係を

探るということが、この研究所の使命だと、そしてそれがないと地球環境問題は根本的には解決されないということですね。

この研究所を作ったもう一つの基本的な認識は、具体的に人間と自然の関係を解析するときはどうするかということです。地球環境問題というと、みんないきなりグローバルな話だと思ってるでしょう。ところが現実の問題は、非常にローカルに起こっている。ある地域について、実際に起こっている問題のそれぞれを、そういう基本認識に立って、きちっと具体的に解析しなきゃならない、ということですね。そのためには、そこにいるんな分野の人が関わらなきゃ解明できない。しかも、そこで人間が今後いったいどうしたらよいかを考えるために、共通意識をもった色々な分野の人が横断的に関わる必要がある。だから、それに相応しい研究組織にしよう、ということになったわけで、それがまあ、研究所の掲げる「総合性」という方針ですね。

— いま、研究プロジェクトはどのような状況ですか。

日高 この4月から、だいたい15本になります。その1本1本がただ並んでいるだけではなくて、お互いが関係を持ち合って、そこからもっと新しい視点や研究を出していくことが、大事じゃないかと思っています。

— たとえば、水に関係するプロジェクトが幾つかありますけれども、それらについても互いに総合した何かを出したいということですね。

日高 ある地域に水が無い。以前なら、専門家が調べだした地下水を汲み上げ

たり遠くの川の水を引いてこよう、ということになったわけですが、そういうことをしているうちに、深い井戸を掘っても水が出ないというところに来ちゃってる。しかし、今までとは違うもうひとつの方法が何かは、まだ誰も知らないわけですよ。それを探りたい。水をテーマにしたそういう国際シンポジウムも、この秋にやりたい。

— 話は変わりますが、地球研が他の研究所と、ものすごく違うと思うのは、研究プロジェクトの進め方です。何段階もの評価をめぐり抜けて、だんだん成長していくというシステムは、ユニークだと言えるでしょうね。

日高 まず、テーマを見つけて、プロジェクト・リーダーになる人を立てて、研究所の皆さんに聞いてもらうという企画段階があります。そこでその問題を明らかにすべきだ、ということになって、こういうふうな方式でやったらたぶん成果が出るだろうというあたりで、“インキュベーション研究 (IS)”を立てるんですね。それを皆さんに聞いてもらって、それでいけるんじゃないかなということになったら、今度は“フィージビリティ・スタディ (FS : 実現可能性 研究)”をやる。半年か1年、20人、30人が携わって、実際に研究を進められるかどうかを研究する。そして、それを、外国人も含めて完全に外部の、色々な分野の人からなる評価委員会で説明をして、このまま進めていっても大丈夫かどうかを見てもらう。これは本当に進めるべき研究だ、となったら、いよいよダツとお金をかけて、本格的にやりましょうという“本研究 (FR : フル リサーチ)”になるんで



す。そうになったら、国に予算要求をする。その後も、本研究が始まって2年目のところで、本当にちゃんと予定通りいっているか、このまま進めて本当に成果がでるのかということ、また評価委員会に見てもらおう。それで通れば、本当に5年間本研究をやることになるわけです。5年というのは短い、研究というのは、もっと長期間かけてやるべきであるという意見もあるんですけど、地球環境問題では30年後に、研究の結果こうしなきゃとわかって、もう遅いんじゃないか、やっぱり5年ぐらいで目処つけてやらなきゃいかん、と考えて5年ということにしています。これが、インキュベーションからフィージビリティ、本研究への流れです。

—最初のインキュベーションですけど、2005年度から、地球研だけではなく、全国の研究者からアイデアを公募することになりましたね。

日高 地球環境問題を、日本の国立の研究所在ちゃんと真っ向から研究しなきゃいけない。そのアイデアは、研究

所の中の人だけが出すんじゃなくて、日本中の研究者に出してもらって、この地球研に集まって、研究してもらおう。そのための研究テーマの公募です。

— 沢山集まりましたね。

日高 20本ぐらいの応募があって、インキュベーションは地球研の内外合わせて11本採用されましたが、そのうちの7本は外部からでしたね。FSにはまだなっていませんけど、最終的にFSとなり、かなりの予算がついたものが動きだすはずですよ。

— 応募された研究者の方もここに来ていただくことになりますか。

日高 本研究になれば、地球研に来ていただくことになります。リーダーの方は、インキュベーションのときは自分の所属機関でやって、FSに応募するんですね。FSとなったときには、地球研の客員になってもらう。いよいよ本研究となったら、地球研に籍を移してここでやっていただくことになります。

— いわば全国の研究者に開かれた研究所ということですね。

日高 それ研究所の掲げているポリシーのひとつである「中枢性」ですね。リーダーは任期制で、そのプロジェクトが走っている間は地球研の人間になるけれども、共同研究者を全国の大学から集められるし、研究資金は国から来る、というメリットがある。そして、プロジェクトが解散した後は、地球研で新しい研究方法を培った人が、またあちらこちらに行って、そこで活躍してもらおう。大学の側としても、他の分野と一緒に研究をした経験のある人材が戻ってくるでしょ、それは非常に得な話なんです。これがポリシーのひとつ

つである「流動性」ですね。

— ようやく新しい建物ができて、2月から引っ越しが始まりますね。建物については、どのような考えで作られたのですか。

日高 分野横断的に、いろいろな人が地球研に入ってやることになっているでしょ。はじめのうちは、自然科学系の人と人文系の人と言葉が通じなかったんですよ。だけれども、これまでこの狭い仮住まいの小学校の建物の中で、みんなでわいわいやっているうちに、話が通じるようになりました。その経験を活かして、新しい建物も大部屋制にしました。プロジェクトごとに大きな部屋を15室作って、それらを1フロアに並べたんです。さらに、研究室の脇に予定していた廊下をやめましてね、食堂に行くにもトイレに行くにも、嫌でも隣のプロジェクトの部屋を通って行かなきゃならないようにしました。動物行動学的にいってもね、しょっちゅう横を通って見てれば、やっぱり挨拶ぐらいはするようになります。ちょっと面倒なようだけど、それが非常に大事でして、そこまで計算して作った研究所の建物は無いんじゃないでしょうか。

もうひとつ、新しい建物の大事な特徴は、周りがオオタカも棲む自然豊かな演習林に囲まれた、里山のような環境にあることです。自然を壊さないように、非常に配慮して建設を進めましたね。

— 研究の進め方のユニークさも、建物のユニークさも、これからこのニューズレターで、皆さんに伝えていきたいポイントですね。

2006.1.20.

元京都市立春日小学校の旧研究所建物にて。

聴き手: 斎藤清明

[撮影: 二村春臣]

2005年10月16日、NHKスペシャル新シルクロードシリーズの第8集「カラホト 砂に消えた西夏」が放映されました。カラホトとは、別名を黒城といい、中国西域のゴビ砂漠の中に築かれた古代王朝西夏の城郭都市のことです。オアシスのほとりで栄えたこの城郭都市は、今から約600年前、砂漠の中にその姿をこつ然と消します。なぜカラホトが消滅したのか、番組は最新の研究成果と美しい映像からその謎に迫りました。この番組で取り上げられた研究プロジェクトが、総合地球環境学研究所のオアシスプロジェクトです。カラホトの消滅は、単に中国史の謎ではなく、現代のこの地域での水不足や砂漠化といった地球環境問題の解決に資する重要なテーマであるとの認識のもと、このプロジェクトが始まりました。今年、2006年にはプロジェクトも5年目の最終年度となり、大詰めをむかえています。砂漠に消えてしまったカラホトの歴史から学べることは、いったい何なのでしょう。オアシスプロジェクトの成果を整理しながら、プロジェクトに参加した一個人として感じたことを紹介したいと思います。

カラホト[Karakhoto; 写真1]は、中国西部の乾燥域を流れる黒河と呼ばれる川のほとりにあります。この川は、祁連山脈という四千メートルを越える山々の氷河を源流とし、ゴビ砂漠を流れて、最後は居延沢という湖に流れ込む内陸河川です。この黒河の流域では、現在、砂漠化が深刻な問題となっています。かつて川沿いに生い茂っていた木々も閑散とし、黒河の水は途中で途

水が涸れたオアシスから学べること

水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷

[通称:オアシスプロジェクト]

竹内 望

切れ、末端の湖の居延沢も水が涸れ果てています。プロジェクトは、まずこの現在の砂漠化つまり水不足の原因を明らかにするとともに、過去に同じような砂漠化がおこったのかどうか、その原因は何なのかを明らかにすることをめざします。そして、もともと水の少ないこの地域で、砂漠化という現実に人々はどう向き合っていたのかを、この地域の長い歴史から学ぶことを目的としています。

この目的を達成するために、プロジェクトには、歴史、文化人類学、農学、水文学、雪氷学、気候学、植物学、地理学などの文理幅広い専門家が参加しています。根っからの理系である私が加わったのはプロジェクト開始から2年目のことで、はじめて参加した研究会は、カラホトから出土した古文書を読み解くというものでした。その古文書とは、私が高校時代にもっとも苦手なものであり、大学の入学試験以降もう二度とお目にかかることはあるまい

とっていた漢文でした。しかし、古文書の専門家が漢文を読み、水、気候、民族、農業、牧畜などの専門家が、その文を解釈していくという作業は見事なものでした。モノトーンの古文書がみるみるうちにさまざまな色に染まってく、これが地球研の魔力なのかと強い印象をうけました。

砂漠化の原因には、主に三つが考えられます。一つは、地球温暖化などの地球規模の気候変動による降水量や氷河の融解水の減少です。もう一つは、過放牧による植生の破壊、そして農業用水の過剰な利用による水不足です。後者の二つは人為要因ですが、それぞれ牧業と農業という生業を原因としています。じつは、農耕民は水不足の原因を牧業にあると考え、遊牧民は農耕にその原因があると考えの傾向にあります。この地域は長い歴史で遊牧民と農耕民が激しく争ってきた地であり、現在も水をめぐった両者の対立が続いているとみることができます。



写真1—

砂漠の中にそびえるカラホトの城壁。

今から600年前、ここは水豊かなオアシスであった。

[撮影:竹内 望]



研究フィールドにて。左端が筆者。

プロジェクトの調査の結果、現在の水不足は、黒河中流部での農業用水の過剰な利用が圧倒的な原因であるということがわかってきました。黒河の大きなダムからのびる灌漑水路や、各農家もつ井戸から取水される膨大な水が、乾燥域にしては広すぎる現代の農地を支えてきました。放牧による植生の衰退に関しては、仮に影響があったとしても、保水作用が減少するだけで年間の水量は変わらないはずで、また、祁連山から流れてくる黒河の水の量には、近年変化はほとんどありませんでした。水源となる氷河は、確かに近年小さくなってきていましたが、むしろ氷河が解けている分、黒河の水量も増えているはずであることがわかりました。人為的な影響が、現在の砂漠化のもっとも大きな原因だったので、

それでは、600年前のカラホトの消滅の原因はいったい何なのでしょう？このプロジェクトで私が担当しているのは、氷河深くに保存されている昔の氷をアイスコア(氷柱)として掘り出し、それを分析して過去の環境を調べることです。プロジェクトでは2本のアイスコアの掘削に成功し[写真2]、現在もまだ分析している最中です。アイスコアからは、ちょうど600年前ごろは今よりも気温が低かったことがわかりました。気温の低下は氷河の融解を減らし、黒河の水量を減らします。このことは、カラホトの古文書の記載と矛盾しません。カラホト消滅の原因は、気候の寒冷化による水不足である可能性が高いことがわかりました。カラホト周辺の遺跡の調査からは、多くの灌

漑施設と農地があったことがわかりましたが、その技術も気候の寒冷化には勝てなかったのです。

NHKの番組は、砂漠に追われ立ち退きを余儀なくされる現代の住民の切ない歌声で始まります。カラホトから学べることは、この土地はそもそも環境の変化が激しい場所であり、農耕による定住には限界があるということではないのでしょうか。かつて東からこの地に来た定住農耕民は、その自然の変化を技術をもって抑え、安定した水供給を得ることによって自分たちの生を全うしてきました。しかし、カラホトの消滅や近年の砂漠化は、農耕の力をもってしても、この地の自然の変化を抑えることはできないことを示しています。アイスコア分析結果をみながら毎日思うのは、自然は決して安定はしていないということです。とくに黒河流域では、今年あった水が来年もある保証はまったくありません。将来、氷河がますます小さくなれば、補填され

る氷の解け水もなくなり、その水不足の厳しさはいっそう大きなものになるでしょう。では、そのような自然の変化に、いったい人々はどう向かい合えばいいのでしょうか。たとえば、この地で長く農耕民と対峙してきた遊牧民の文化に、そのヒントが隠されているような気がします。彼らは、大きく変化する自然にもっとも適応的な文化をもっていると思われるからです。これは黒河流域のような乾燥域だけでなく、世界中すべての地域に共通の問題でもあります。われわれ日本人の多くも、農業を生業とし、土地改良によって安定な環境を手に入れましたが、それゆえに将来の大きな環境の変化には脆弱であるような気がします。われわれは来るべき環境の変化にどう向き合うのか。そのような意味で、自然環境の変化の大きいこのような地の文化に、多くの学ぶことがあるのではないかと、氷河の研究に携わる一人として思いました。



写真2—

ロシア、アルタイ山脈の氷河から掘削したアイスコア。
この氷を分析し、過去数千年の環境の変化を復元する。

[撮影:竹内 望]

世界各地の島嶼は、水不足、土壌流失、河川・海洋汚染、生物多様性消失等のさまざまな環境問題を抱えています。島嶼は閉鎖系としての性質が強く、問題がとくに急速に深刻化しやすいため、緊急の対処が求められることが多々あります。

本プロジェクトは、島嶼における環境問題の解決に資する研究として、沖縄県西表島をモデルに展開しています。自然環境からの観点として、地理の理解と水収支の解明、森林生態系の機能の解明と維持、サンゴ礁生態系の機能の解明と維持を主な研究課題とし、また人間活動からの観点として、経済活動を主な研究課題としています。これ

地域との連携を試みて

■ 亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用

[通称:西表プロジェクト]

■ 高相徳志郎

らの研究課題を基に、“亜熱帯島嶼における自然環境と人間活動の相互作用の解明”を図り、“亜熱帯島嶼における自然環境と人間活動が調和する社会システムを確立しうる選択肢を提示”することをプロジェクトの最終目的としています。

従来より地域密着型で研究を展開してきましたが、2005年度に地球研・西表島分室が祖納地域に開設されたことによって、施設面でもこの展開方法が進めやすくなりました。プロジェクトが進展するに従って、公民館の果たす機能が大きいことが認識できましたので、公民館とも密に連絡を取るようにし、また、地域の西表小・中学校と

も連絡を取るよう努めています [写真1~2、表1写真参照]。

西表島の自然環境は、きわめて危うい状態にあるため、プロジェクトではこの保全を最重要課題としています。また、伝統芸能等の文化の伝承・発展に関しても取り組んでいます。とくに若年層の不足からきわめて深刻な状況にあり、最後の記録を残す段階と言わざるをえない伝統芸能などもあるため、映像での記録も重点的に進めています。

これまでの研究から、西表島の環境問題を解決するには、経済的基盤の確立がもっとも重要な観点であるということが分かってきました。したがって、今後はこの観点を軸にプロジェクトを



写真1—
西表島の節祭
[撮影:佐久間文男]



節祭の旗頭を迎える筆者
[撮影：斎藤清明]

展開し、これに直接的に貢献すると考えられる研究課題についても現在充実を図っています。

上記の目標を達成するためには、地域の理解を得て研究を進めるとともに、学校・社会教育を継続的に進める必要があります。ですので、現プロジェクト終了後も視野に入れたプロジェクトの展開・運営が重要と考えられます。世界的に見ても、西表島の自然・文化は、これに見合う貴重なものだといえます。西表島において環境問題にかかわる多種多様な成因とその因果関係を示すことができれば、他の多くの島嶼でも応用できる成果をもたらしてくれます。

プロジェクトでは、文献データベース (<http://chikyu-iriomote.cc.uryuky.ac.jp/>) と映像ライブラリー [図1; <http://www.gifu-u.ac.jp/~kawakubo/iriomote/index01/>] の二つのページを公開中です。



写真2/上—
西表小学校授業
[撮影：川窪伸光]
図1/下—
西表映像ライブラリー

活動項目	場所
■学校教育[活動内容]	
カムリワシってどんな鳥[プロジェクト担当授業]	上原小学校
イリオモテヤマネコ[プロジェクト担当授業]	上原小学校
カムリワシってどんな鳥[プロジェクト担当授業]	西表小学校
わたしたちの空[教材映像の提供]	上原小学校
江戸家小猫さん講演会[プロジェクト主催講演会]	祖納公民館
小学校ウミショウブ観察会[総合的な学習の時間協力]	祖納・地球研西表分室
小学校夏休み自由研究[自由研究協力]	西表小学校・西表分室
小学校運動会・参加[記録・参加協力]	西表小学校
文部科学省学校訪問[視察]	西表小学校・上原小学校
小学校授業(生活科・理科)[プロジェクト担当授業]	西表小学校
小中学校学習発表会・参加[展示協力]	西表小中学校
小学校授業(理科:雨水のpH)[授業協力]	大原小学校
小中学校駅伝大会(記録・参加協力)	西表小中学校
■社会協力[活動内容]	
織物工房協力[地域産業育成事業協力]	手仕事センター[浦内]
ハンセンさん講演[プロジェクト主催講演会]	上原多目的集会施設
婦人会・ウミショウブ観察会[プロジェクト企画観察会]	祖納・地球研西表分室
西表環境教育プログラム作成協力[地域環境教育協力]	上原多目的集会施設
婦人学級[地域社会教育協力]	祖納公民館
中野公民館学校(炭坑跡記録)[地域社会教育協力]	中野公民館
■文化活動・参加協力[活動内容]	
節祭(シチ吉日)[記録・参加協力 2回]	祖納
節祭(ユークイ)[記録・参加協力 2回]	祖納
節祭(トツズミ)[記録・参加協力 2回]	祖納
地域歓迎会[移転を歓迎して頂いた]	祖納公民館
世願祭(ユニンガイ)[参加(招待)]	祖納
研究室紹介[移転時の研究室紹介]	地球研西表分室
新盛家屋根補修[参加協力]	祖納
子供の日親睦運動会[参加協力]	祖納
母の日行事[参加協力]	祖納公民館
カジマヤ[記録]	干立・干立公民館
豊年祭わら収集[記録・参加協力]	祖納
豊年祭・御嶽願い[記録・参加協力]	祖納
豊年祭・子供みこし[参加協力]	祖納
豊年祭・大綱作り[記録・参加協力]	祖納
旧盆・アンガマ[記録・参加協力]	祖納
敬老会[参加協力]	祖納公民館
新春駅伝大会[記録・参加協力]	西表青年会
新年会[記録・参加協力]	祖納公民館
成人式[記録]	祖納公民館
消防出初式[記録]	祖納・干立公民館
子午線マラソン[記録・参加協力]	祖納

表1/上—
地域教育文化活動

地球研では毎年1回、各プロジェクトなどが成果を発表して相互に検討する「プロジェクト研究発表会」を行っています。今年度も、去る12月14日から16日までコープイン京都を会場に行われました。

今年は、昨年までとちがってプロジェクトの数が多く、3日にわたる討議になりました。連日100名を超える所員やプロジェクトメンバーが出席し、活気ある討論が続きました。研究面での討議を3日にわたり、それも大多数の構成員が参加して行っている研究機関はそう多くはないでしょう。その様子を簡単に紹介しておきたいと思います。

地球研のプロジェクト研究発表会のひとつの特徴は、誰もが思ったことを発言できることにあります。日本では、たとえば若い大学院生が教授に「それは間違いだと思う」とはなかなか言えませんが、地球研では、その自由はほぼ保障されています。自分のボスがプロジェクトにいないとか、うるさがた(失礼!)が利害に関係していないなど、いくつかの理由があるからでしょうが、この風土は護り続けたいと思います。

地球研のプロジェクトは、いろいろな分野の研究者が参画する点に大きな特徴があります。異分野間の議論は自分の分野での論理だけでは成り立ちません。「自分の常識は相手の非常識」ということもあるわけで「複眼思考」が求められます。

とくに、質問に答えるのが大変です。学会発表と違い、まったくの異分野の

研究スタイルを共同でつくりあげる

平成17年度 プロジェクト研究発表会

議長団 佐藤洋一郎

人から、考えもしなかった質問が投げかけられます。相手の論理が理解できないと、質問に対する的確な答えはできません。

「地球研に来て議論がうまくなった」とは、あるプロジェクトリーダーの述懐です。私は、地球研は「プロジェクトリーダーの学校」だと思っています。複眼思考のできるリーダーを育ててゆく使命が、発表会にはあるのだらうと思います。

昨年の発表会とくらべて、内容はどうであったか。ここが一番大事です。かつて研究所におられた先輩たちが幾人か出席しておられましたので、意見を聞いてみました。昨年より発表がわかりやすくなり、また研究の進展もうかがえる、というご意見が多かったようです。1年を経過したわけだから、研究の進展は当然といえば当然のことですが、「わかりやすくなった」こと背景には、やはり各プロジェクトやそのリーダーの努力が反映されているのだと思います。

毎年、研究発表会は激論になることが多いのですが、今年もいくつか激しいやりとりがありました。なかでも、始まったばかりの研究プロジェクトについては、その研究が「地球研で取り上げるにふさわしいかどうか」が議論されるので、ことさらです。研究の根幹にかかわる質問だけに、答えるほうも真剣です。「のど元にあいくちを突きつけられた」プロジェクトのリーダ

ーは必死です。それに答えないかぎりプロジェクトが成り立たないわけですから、深刻に考えることを迫られます。しかし、こうしてプロジェクトは次第にプロジェクトらしくなってゆきます。

今年の発表会は3日にも及ぶということで、昨年とは異なり、所内で公募した7人からなる「議長団」を組織して司会や議論の整理を行いました。これもおおむね好評でした。「地球研の研究として行う意義」など、多くの所員が関心をもっている点について、議長が交通整理をしておいたので、議論がスムーズになったものと思います。こうなると、司会には、ある程度全体を見渡す力量が求められます。若手の中にもこういう訓練を積んだ人が出てくることは重要でしょう。「全員でつくる発表会」をめざして、来年度もいろいろな改良を考えてみたいと思います。

また発表会では、今後の地球研のあり方などについても意見が交わされました。プロジェクト終了時にその成果をどう発信するか、その成果は社会や次世代プロジェクトにどのように還元されるべきかなど、決めるべき問題は山ほどあります。これらの点については、「そもそも研究とは何か」という大命題をめぐっての考え方の相違もあり、簡単に合意点が見つかるとも思えません。結論を急がず、繰り返し議論する忍耐を、所員一同がもち続ける以外ないのかもしれない。



写真1/左頁下—
プロジェクト研究発表会での質問者。
写真2/右—
プロジェクト研究発表会風景。



平成17年度 総合地球環境学研究所・プロジェクト研究発表会

発表者

課題

1日目:12月14日
高相徳志郎 亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用
吉岡崇仁 流域環境の質と環境意識の解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として
梅津千恵子 社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス
中野孝教 地圏資源の利用に伴う東アジアの物質循環系の変化の解明
長田俊樹 環境変化とインダス文明
内山純蔵 東アジアの新石器化と現代化:大河水系の循環利用史
窪田順平 民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷
川端善一郎 病原生物と人間の相互作用環の解明

2日目:12月15日
佐藤洋一郎 農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
谷口真人 都市の地下環境に残る人間活動の影響
湯本貴和 日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討
福嶋義宏 近年の黄河の急激な水循環変化とその意味するもの
中静 透 持続的森林利用オプションの評価と将来像
白岩孝行 北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価
秋道智彌 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究:1945~2005

推進プロジェクト
関野 樹 学術研究の方法・成果を蓄積・再利用するための方法論の構築—「環境学」の継続的な研究に向けて

推進研究
斎藤清明 地球研における発信について

若手合宿研究会報告
フリーディスカッション

3日目:12月16日
渡邊紹裕 乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響
早坂忠裕 大気中の物質循環 に及ぼす人間活動の影響の解明
谷内茂雄 琵琶湖—淀川水系における流域管理モデルの構築
中尾正義 水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷
鼎 信次郎 地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望

研究戦略WG [報告・討論]

招へい外国人研究員の来訪

地球研では、外国からの研究員をさまざまなプロジェクトに招へいしています。2006年1～3月の異動については、次のとおりです。●フランスから来られていたCOBBI, Janeさん(2005年11月1日～2006年1月31日)。秋道教授のもとで研究されました。●台湾の国立中興大学から来られていたFENG, Fong-Long(馮豊隆)さん(2005年10月3日～2006年2月28日)。吉岡助教授のもとで通称IDEAプロジェクトにかかわって研究されました。

連携機関懇談会を開催

地球研の研究プロジェクトに連携する機関との懇談会(第3回)が2月1日、JR京都駅前の新・都ホテルで開催され、全国から9機関の代表者が参加しました。出席者は北から、北海道大学低温科学研究所(若土正暁・所長)、東北大学理学研究科大気海洋変動観測研究センター(中澤高清・センター長)、東京大学生産技術研究所(浦環・副所長)、金沢大学自然計測応用研究センター(柏谷健二・センター長)、名古屋大学地球水循環研究センター(上田博・センター長)、京都大学生態学研究センター(大串隆之・センター長)、



国立民族学博物館(田村克己・副館長)、鳥取大学乾燥地研究センター(神近牧男・センター長)、琉球大学熱帯生物圏研究センター(熊澤教眞・教授)の方々。

日高所長が「連携機関の協力を得て研究プロジェクトを進めています。さらに今後の連携のあり方について、地球研の方針を説明させていただき、ご相談したい」とあいさつ。「連携」に二つのタイプがあること、研究プロジェクト実施の基本的な考え方を説明した。各機関からは質問や連携のあり方についてのそれぞれの見解が述べられました。

第10回地球研市民セミナー

地球研の研究活動をわかりやすく紹介するため、市民を対象にした講演会を「地球研市民セミナー」と名付けて、2004年11月、春日研究施設に隣接する同志社新島会館で開催しました。毎月の第1金曜日夜を原則に(連休や夏休み、正月休みなどは休会)催し、各研究プロジェクトのリーダーらによる「シルクロード地域のロマンと現実」(第1回、中尾正義教授)や「生き物の豊かな森は持続的な社会に必要な要素である」(第9回、中静透教授)といったテーマで、好評です。

2月3日の第10回は吉岡崇仁助教授



による「環境の物語り論」でした。サブタイトルは「環境の質と環境意識」。環境とは「物語られるもの」であるとの位置づけから、何かが見えてくるかもしれない、と語りました。

3月3日の第11回は白岩孝行助教授による「アムール川・オホーツク海・知床-巨大魚付林という考え-」が行われました。

地球研が上賀茂に移転しました

北白川の京都大学植物園、そして丸太町の旧春日小学校校地での期間を経て、地球研は、2006年2月に、新しい上賀茂研究施設に移転しました。「引越の作業にあたっては、研究業務を中断することなくスムーズに行えるよう、研究員そして事務方の皆さまの大変なご協力がありました」と、無事引越を完了した責任者の言。山裾に長屋の大部屋を模して作られた新しい研究棟で、これまでとはまた違った里山の自然を感じながらの研究生活に入ります。施設については次号で詳しくご紹介する予定です。なお、新施設のお披露目として、5月には式典と、人間文化研究機構のシンポジウムが開催されます。詳しくはp.12をご覧ください。



出版物紹介1

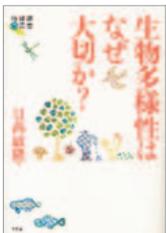
地球研叢書 1

『生物多様性はなぜ大切か?』

日高敏隆 編

2005年4月 昭和堂 2,415円

「地球研叢書」とは、地球研の研究や成果の意味を学問的にわかりやすく紹介する出版物で、その第1冊目がこの本です。編者の日高敏隆所長（動物行動学）のほか、中静 透教授（森林生態学）、内山純蔵助教授（先史人類学）、佐藤洋一郎教授（植物遺伝学）といった地球研メンバーと京大の川本芳助教授（動物集団遺伝学）による執筆です。近年の地球環境問題についての主要なキーワードである“生物多様性”について、地球研が開催した第3回地球研フォーラム「もし生き物が減っていくとー生物多様性をどう考える」(2004年7月10日、国立京都国際会館)をもとに編られました。「生物多様性」が人間の環境問題としてどう重要なのか。これを「生物多様性とはなんだろう?」「『雑食動物』人間」「遺伝子からみた多様性と人間の特徴」「文化の多様性は必要か?」「生活のなかの生物多様性」の五つの章で説いています。取り上げた例の多様さが、地球研のユニークな研究環境を示したものとなっています。叢書第1号は、地球環境の問題は自然と人間文化の問題であるという、この研究所の姿勢を明確に打ち出したものがあります。そしてこれは、いかにワクワクとした研究成果の伝達をなしえるかという、新設の研究所にとってのサイエンス・ライティングの実験のはじまりでもあります。



出版物紹介2

地球研叢書 2

『中国の環境政策 生態移民—緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義 編
2005年7月 昭和堂 2,940円

オアシスプロジェクト（本号p.4-5参照）のリーダーである中尾正義教授（氷気気候学・雪氷水文学）をはじめとする地球研のメンバーほか計14人による執筆です。地球研叢書2冊目である本書のもととなったのは、地球研と中国社会科学院民族学人類学研究所が、2004年7月に中国・北京で共同開催した国際シンポジウム「生態移民—実践と経験」です。本書は、“生態移民”というまだ定義の曖昧な、中国政府自身は明確には使用していない言葉（「生態」は和製漢語の逆輸入）についての慎重な解説を行う序章から始まります。続いて、第1部<生態的側面を問う—『生態移民』は環境保全を果たせるか?>、第2部<経済的側面を問う—『生態移民』は貧困削減を果たせるか?>、第3部<文化的側面を問う—『生態移民』はいかなる文化変容をもたらすか?>という三つの視点からの検証がなされます。「(前略)地球環境問題に対する取り組みは、どのようなものであれ、多くの人にアプリアリに支持されがちである。しかし、それが真に有効な取り組みかどうかという地道な学問的な検証が不可欠である」(本書まえがきより)とあるように、この3部構成は、地球環境問題が、このいずれを欠いても現実的ではないということを示したものといえるでしょう。



出版物紹介3

『里と森の危機—暮らし多様化への提言』[朝日選書]

佐藤洋一郎 著

2005年10月 朝日新聞社 1,155円

佐藤洋一郎教授（植物遺伝学）がリーダーを務める地球研での通称「里プロジェクト」(「社会的、生態的そして地球環境問題としての遺伝資源の喪失」)の内容も紹介されている著書です。

里や里山に関する活動や著作は近年増えていますが、本書の特徴は“農”という環境問題を幅広く見据えつつも、具体的には、植物遺伝学のバックグラウンドから得た実証主義的なデータが紹介されていることです。たとえば、コシヒカリ人気とその陰で心配される遺伝資源的な一様化の話として展開する第1章や、ラオスの野生イネの移動におけるスイギユウの活躍を確認した研究者の粘り強いフィールドワークを伝える第5章などです。これらのテーマからわかるように、本書は一般の方にも読みやすい親近感を備えています。

本書中にある、「もともと維持に手間のかかる」多様な社会のために「多様性を取り戻すための手間を惜しんではなるまい」という主張を裏付けるのが、里プロジェクトの使命でもあるのでしよう。より広い目で森の危機について考える参考書として、同じ朝日選書の『森と田んぼの危機』も併せて読まれることをお勧めします。



竣工記念式典

上賀茂の新施設完成と移転、その開所を記念して、竣工記念式典を5月26日(金)に行います。

人間文化研究機構シンポジウム

「人はなぜ花を愛でるのか？」をテーマに、人間文化研究機構の第4回公開講演会・シンポジウムが5月27日(土)午後1時半～5時、京都市左京区宝ヶ池の国立京都国際会館で開催されます。

地球研など5機関で構成する人間文化研究機構が開催するもので、京都では初めて。日高敏隆・地球研所長と白幡洋三郎・国際日本文化研究センター教授がオーガナイザーで、「人はなぜ花を愛でるのか？」という、人間文化の根源に連なる問いかけをめぐる、さまざまな視点から論じ合います。

参加申込、問い合わせは、人間文化研究機構総務課シンポジウム係 (FAX: 03-6402-9240、または電子メール: sinpo_4@nihu.jpまで)。

第12回地球研市民セミナー

上賀茂の新しい建物で地球研市民セミナー(第12回)を開きます。

●4月14日(金)午後5時半から7時、佐藤洋一郎教授による「モンズーンアジアからシルクロードへ—ユーラシア環境史事始」です。

この回の市民セミナー参加の方に、施設もご案内いたします。なお、第13回は6月9日に予定しています。

地球研フォーラム

毎年恒例の地球研フォーラムは7月8日(土)、国立京都国際会館で開催します。

テーマは「森は誰のものか?」です。詳細は次号以降にお知らせします。

新施設へのアクセス

JR京都駅・阪急烏丸駅から地下鉄の終点「国際会館」で下車。シャトルバスかタクシーで5分余。京阪出町柳からは叡山電鉄鞍馬線に乗り換えて17分、「京都精華大学前」で下車、徒歩約5分。



上賀茂だより



地球研は御所の側から上賀茂に移転しました。洛中から洛外へ。京の田舎といった佇まいです。思ったよりは遠くではありません。どうぞ、お立ち寄り下さい。まだ引っ越し荷物が開き切れていませんが、並行してニューズレターの編集です。創刊号は、いかがでしょうか。[斎藤]

写真/上一雪の新施設工事

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報 [地球研ニュース]

Humanity & Nature Newsletter No.1

[隔月刊]

ISSN 1880-8956

発行日

2006年4月1日

発行所

総合地球環境学研究所

〒603-8047

京都市北区上賀茂本山457番地の4

電話：075-707-2100 [代表]

Eメール：newsletter@chikyu.ac.jp

URL：<http://www.chikyu.ac.jp>

発行

総合地球環境学研究所 広報委員会

委員長

秋道智彌

編集

総合地球環境学研究所 研究推進センター

センター長

斎藤清明

協力

[株]シー・ディー・アイ

本紙の内容は地球研のウェブサイトにも

掲載しております。

郵送を希望されない方はお申し出ください。

表紙写真—

キルギスタン天山山脈での馬による調査荷物の運搬

[撮影:竹内 望]